

## 第七回 林立萍教授(日本語訳)

107年度第7回1学期 One Asia 基金会国際講座

「アジア地域における日本語の語彙と文化」

第7回の講座は台湾大学日本文学科教授林立萍先生の講義です。テーマは「アジア共同体 日本昔話の語彙と文化」

林教授の講義の概要は次のとおりです。

言語は、社会文化の産物だけでなく、文化的な記録であり、そして人間の心の支えであり、情感に関するはたらきと密接なつながりがあり、社会を構成する重要な道具です。

「心、言語、社会」の間には相互関係があります。

言語の音、文法、語彙の三大要素のうち、語彙は言語使用者の文化や民族の思考様式を反映しています。言語は文化や社会を考察するための一つの鏡です。語彙の特徴を観察することで、言語を使用する民族の思考様式を窺い知ることができます。

本時の講義では言語と文化の接触に切り込むことにより、日本昔話の語彙を認識することを通して、アジア共同体の中の日本とその文化を理解します。

現段階の観察として、昔話の語彙は次の事柄の反映と考えられます。

1. 仏教に関連する言葉の量と日本伝統である自然信仰の神道と区別がつけにくく、これは「神仏習合」の社会様相を反映したものである。
2. 登場人物の語彙では、男性の大部分は高齢であり、女性は比較的若い女性であり、息子の嫁だったりする。これらは日本の「家父長制」の家族制度と関連があるかもしれない。

「実直、誠実、知恵、孝行、勤勉、武勇」などのキーワードは、庶民の期待する人物像の代表であるといえます。

「幸福、安穩、楽しみ」は、彼らが期待する生活スタイルに沿ったものといえるでしょう。

また、じじばばの呼び方、父母や親族の用語の使用から見て、このような考え方は、江戸時代の生活様式を反映していると思われます。

林教授は、近年の同級生との日本昔話（昔話）の研究と成果を学生たちと共有しました。

最初に、林教授は学生に語彙と文化の関係を尋ねました。その後、前置きとして日本の著名な社会言語学者鈴木孝夫氏の著書「ことばと文化」を引用し、「文化は語彙を通して表現され、語彙は文化を表現する。語彙が表現した文化と文化を表現する語彙は同じではない。」と語りました。

次に、林教授は、日本の過去の定義を学生に説明しました。昔話は古代から伝えられた物語を意味する日本語の語彙です。よく知られているように、桃太郎や浦島太郎は台湾人にとってなじみ深い物語です。過去に私たちはすべて童話と呼んでいましたが、林教授は昔話と童話との違いも説明しました。

林教授はその後、日本昔話に現れた語彙と、日本人学生が気にする日本語能力試験（JLPT）に現れた語彙を比較分析しました。日本語教育における語彙の重複率は、初級→中級→上級のようになっていて、林教授の初めの結論は、日本昔話には 36%程度の級外の語彙がありますが、反復部分が初級の中で最も多いので、読んでみることをお勧めします。

林教授はその後、膨大な日本昔話の本と漫画の DVD を分析し、その語彙の特徴として最も多いのは人名（物語の主人公）、地名、神仏、幽霊、動物、及び自称の言葉等です。神仏や

幽霊、妖怪などの語彙の中で、荒神、氏神、稲荷等の日本神道の語彙以外に、観音、大日如来、地藏菩薩、釈迦如来、阿弥陀如来、和尚、餓鬼など、多くの仏教関連の語彙があります。

なぜ、子どもたちの読み物の中に、鬼、幽霊、妖怪等子どもたちが怖がるキャラクターが多く登場するのか？林教授は、日本の著名な文化人類学者で国際日本文化研究センター所長の小松和彦教授の話を用いました。その話の中で、妖怪は人を怖がらせるが、これらは物語の中で大衆娯楽的な効果がある、ということです。この意外な結果は大変印象的です。

最後に、林教授は「昔話は、特定の詩人や文学者によって完成されたものではなく、その物語の主人公や場面は主に民族に馴染みのあるキャラクターの場所であり、その内容は一般庶民の生活にも密接なつながりがある。人々、愛、自然、そしてその他の要素に関する人々の解釈や相互作用を含む非常に密接な関係は、非常に強い民族文化の色彩が濃厚である。また、昔話の物語は個性がなく、芸術的な風格がない一方で、昔話の物語を読むことによって、世界の理解を深め、国際感覚を養う手段として文化的思考をある程度理解することができる。方法。言い換えれば、昔話の物語は、ある地域の文化的特徴を議論し、理解する際に無視できない参考資料でもある」と語りました。

(林教授 PPT からの引用)

私たちが外国語を学ぶときは、基本的な語彙や将来の仕事に必要な語彙に加えて、言語の本質を習得するためには、その言語で書かれた文学や文化を深く理解しなければなりません。例えていうと、日本で生活した人は、「42 歳」が人生の運気が最悪の年であり、災害を取り除くために神社に行く必要があることを皆知っています。しかし、一般的な日本語学習者は、必ずしもその理由がわからないのではないのでしょうか？42 歳の日本の発音は「死の年」と同じなのですから。日本人と台湾人は同様に 4 という数字をとっても嫌っています。このような文化風習方面のことは、一般の授業での教科書には見られないかもしれません。

日本の子どもたちは日本の昔話の学習で自身の文化を学びます。同じように、私たちが日

本語を学ぶ時、もし日本昔話を活用することができれば、教科書では学べない別の語彙を手に入れることができます。また、物語の中の人物を通して日本の歴史思想と文化を理解します。この講演は浅いものから深いものへと進み、そして、学生たちはかなり興味を持ってより多くのことを学んだと信じます。

(原稿：陳順益)